民俗学者としての市橋鐸

――尾北の伝説研究史から――

高木史人

春火燵話なかばに寐入りけり
（いちはし・たく『句集基地の町』一九七〇年、作は一九四七年）

一、『犬山市史』の市橋鐸像

『犬山市史　別巻　文化財・民俗』（一九八五年）の「文化財　第二章　人物」の「市橋鐸麿」の項には、次のように記されている。

犬山藩侍医鈴木家の次男として、明治二六年（一八九三）三月に生まれた。兄敏也が家業を継がず学問の道を選んだので、父光男は弟に何とか医道をと望んだが、本人もまた学問の道に進んだ。犬山尋常高等小学校から同四〇年（一九〇七）、明倫中学校（現明和高校）に進み、大正四年（一九一五）国学院大学に入学、国文学科を卒業後、同七年九月北海道函館商業学校に就職した。同八年、市橋みちと結婚、市橋姓となる。大正九年、名古屋商業実務学校教諭、同一一年、一宮高等女学校に転任、同一二年三月妻は長女蒼生（たみ）を残して病没、二六歳の生涯を閉じた。同一三年一〇月、伊藤しげと再婚した。蒼生を養母の許に残し、岐阜県立海津中学校に翌年八月転任。翌年、実父が没し、鈴木家三二七年の歴史の幕を閉じた。昭和二年、愛知県小牧中学校に転じ、一男二女の父親として、新しい生活が始まった。同九年養母、翌年実姉を相次いで失った。同一一年、小牧市西町に転居、同一六年、四八歳で小牧中学校を退職、名古屋叢書編集主任となる。同二〇年三月の名古屋空襲にも、原稿を保管した、名古屋市鶴舞図書館の地下室は火災から免れ、全四六巻編集の大事業を、同四七年三月に達することができた。実に着手以来三〇年目である。昭和二四年三月、愛知県立女子専門学校に就職。校名変更で女子短

期大学、引き続いて県立女子大学となり、大学教授として、同三九年三月まで勤務、定年制により七一歳で退職した。昭和三四年妻しげ（六二歳）に先立たれた。生涯の俳文学を中心とした研究と踏査は、全国に及び、数数の著書は晩年の二〇年間枚挙に暇がない。その功績は昭和三九年文部大臣表彰、昭和四八年には、八〇歳で叙位叙勲の栄を得、わが国の国文学界への貢献は大きいものがあった。晩年、幅広く小牧市史・犬山市史の編さんを始め、地方史にも指導の手を差し延べたが、病を得て、昭和五八年九月二五日、不帰の客となる。従三位を追贈され、犬山専念寺に埋葬。九〇歳。戒名は椰(ママ)廼庵鐸譽教導居士。

ここから窺えるのは、国文学者、地方史研究者としての市橋鐸麿（いちはし・たくまろ）であって、民俗学者とりわけ伝説研究者としての市橋鐸（いちはし・たく、鐸麿は本名であって、ふだんの筆名には鐸を用いている）の姿は読み取られない。だが、『犬山市史』にも触れているように、市橋は「数数の著書は晩年の二〇年間枚挙に暇がない」が、その多くが、実は民俗学とりわけ伝説研究にかかわるものであり、また、それらの多くが晩年の出版とはいえ、大正から昭和初期にかけてすでに手がけられていた著述に基づくものだったのである。そうして、民俗学者、伝説研究者としての市橋鐸について、従来は、これらの研究者の間でも、ほとんど知られていなかったように思われる[1]。そこでここでは、『犬山市史』の記述から漏れた市橋の愛知県尾北地方における民俗学や伝説研究に焦点を合わせ、かつ、そこから浮かび上がる市橋の研究への評価を試みたい。

二、戦前の著作群から

試みに、愛知県小牧市立図書館で著者「市橋鐸」を検索すると、一〇〇以上の市橋の編著書が蔵されている。その多くが、昭和四〇年代以後に一五〇部限定のタイプ印刷で五〇ページ前後の自刊といった小冊子である（以下、市橋の著書は、特別に表記しない限り、このタイプのものからの引用である）。これらの著書は大きく、自伝・随筆、俳文学関係、民俗学関係などに分けられるようである。『犬山市史』で「地方史」としていたものの多くが、じつは民俗学、伝説関係の編著書なのである。

しかし、市橋の民俗学とりわけ伝説研究への注目は、晩年に突然現れたものではなかった。というのは、先述のように晩年の民俗学、伝説関係の編著書の多くが、市橋の若いころからの著作の再録や書き直しなのである。市橋じしんの申告によると、市橋の戦前の著書目録は次のとおりである。

A　俳文学関係の部

『俳句新釈』（一九二九年、正文館）、2『俳人丈艸』（一九三〇年、白帝書房）、3『川柳新釈』（一九三〇年、正文館）、4『名家俳句新釈』（一九三一年、正文館）、5『丈艸聚影一集』（一九三一年、自家版）、6『丈艸聚影二集』（一九

三三年、自家版）、7『蜂屋元禄俳人抄』（一九三二年、蜂屋元禄俳人建碑）、8『加治田元禄俳人抄』（一九三二年、加治田小学校）、9『史邦と魯九』（一九三七年、俳諧史研究社）、10『個人雑誌　俳諧草紙　10冊』（一九三四年～三八年、自家版）

B　郷土関係の部

1『朝野三輪女』（一九二三年、一宮高女校友会）、2『入鹿物語山姥物語』（一九二八年、小牧中学校友会）、3『入鹿切聞書』（一九三一年、小牧中学校友会）、4『尾北郷土資料写真集』（一九三一年、小牧中学郷土室）、5『続尾北郷土資料写真集』（一九三二年、小牧中学郷土室）、6『続々尾北郷土資料写真集』（一九三三年、小牧中学郷土室）、7『尾北郷土資料写真集』（一九三五年、小牧中学郷土室）、8『尾北巷談』（一九三六年、小牧中学校友会）、9『尾北郷土資料写真集　昭和十一年度版』（一九三六年、小牧中学郷土室）、10『郷土の栞』（一九三七年、小牧中学郷土室）、11『尾張徳川侯行列の図』（一九三七年、小牧中学郷土室）、12『なぎの落葉（尾北俗談）』（一九四〇年、自家版）、13『尾北名勝風俗図会』（一九三八年、小牧中学郷土室）、14『大久地古事記』（一九四一年、小牧中学校友会）（『丈艸伝記考説』一九六四により、一部表記を改めた）

これをみると、市橋のいう「俳文学関係」と「郷土関係」とでは、量的にほとんど拮抗しているといえよう。特に郷土関係の2、8、12は伝説や世間話を記述した資料として興味深い。さて、それでは市橋の早くからの伝説への興味がいったいどのようなところから起こったのか。自伝を引こう。

国漢の担任の癖に郷土研究に興味がある。そこで歴史科の領分にまで侵入して、郷土室をつくつたり、刊行物を出したりしたのだ。異色の存在として認めらるるに至つた。これなどは、あたかも学校の為に働いるように思われたらしいが、白状すれば「自分の道楽」でしただけのもの。この男、決して他の為を思つて動くような性はもち合わしていないのである。

戦争の直前、古典の編集に転職したので、工場行きも免れ、防空壕の中まで稀本、珍本の類を持ちこんで読破する幸に恵まれた。当時としては正に非国民だが、あの険しい時世に好きなことをしていたものは少なかろう。

敗戦後は大学に関係したが、ここでは俳文学の講義に終始した。これも実は道楽の延長なのである。この俳文学てなものは、戦争前は飯櫃に直結していないただの道楽、だからお利口な方はそつぽをむいていられた。（「自分だけの長寿法」『傘寿』（一九七三））

ここから窺えるのは、市橋の郷土研究についての意識である[2]。市橋鐸は、市橋じしんのこれらの研究を「道楽」とみなしているのである。市橋にとっては、俳文学も民俗学も、自分の知的好奇心の対象だったといえる。これは、「実用の学」を標

榜する柳田國男とは、そうとうにずれた意識だと思われる。

だが、市橋と柳田とには交渉があった。市橋は、自著『俳人丈艸』（一九三〇年四月五日印刷、四月一〇日発行、東京市牛込区鶴巻町の白帝書房刊）を柳田に送っているのである。『俳人丈艸』は、蕉門、内藤丈艸の伝記として、出版当時高く評価された。一九三〇年四月二七日付「名古屋新聞」や同年六月一三日付「東京朝日新聞」などに紹介されている。市橋は「「俳人丈艸」批評集」（『句集基地の町』一九七〇年）に、新聞、雑誌に掲載された紹介、書評及び礼状などの書簡を収録していた。その中に、柳田國男からの礼状がみえるのである。

永々御骨折の俳人丈艸御恵与拝受仕候。なつかしく拝見いたしをり候、小生始めてのことのみにて評も出来不申候。誰か紹介するよう社の者へ話可申候。

短文だから、はがきだろう。差出の月日は記されていないが、柳田の文面にあった「社」は東京朝日新聞社だろうから、出版された四月一〇日以降六月一三日以前に書かれたであろう。ちなみに、『柳田文庫蔵書目録』（一九六七年、成城大学）によると、柳田の蔵書にみえる市橋鐸の著書は『尾北巷談』（一九三六年）と『なぎの落葉―尾北俗談』（一九四〇年）の二冊であった。また、『市橋文庫蔵書目録』（一九九〇年、愛知県立大学図書館）中の戦前の柳田の著書は、『赤子塚の話』（一九一一年）、『神を助けた話』（一九一一年）、『ことわざの話』（一九三〇年）、『ひなの一ふし』（一九三六年）、『野鳥雑記』（一九四〇年）、『野草雑記』（一九四〇年）の六冊であった[3]。

市橋と柳田とには接点があった。じつは、市橋の戦前の著作物への調査は途上にある。現時点までの実況でものごとを断定するには危いことも多い。だが、市橋と柳田との接点には、もうひとつ証拠がある。それは、『なぎの落葉―尾北俗談』（一九四〇年二月二五日発行、孔版、限定五〇部）の跋文にあたる「この本を読んで下さる方々へ」に次のような文章がみえるのである。

柳田先生の「郷土研究」を創刊号から読みつゞけさせて貰うた私には、寄稿家名簿に東京住として載せて頂いた過去もありますけれど、心掛けた歳月の古い割合にものになってゐないだけ寂しい思ひです。

『郷土研究』は一九一三年（大正二年）に柳田國男と高木敏雄とによって創刊され、翌年には高木が離れ、柳田の手で一九一七年まで刊行され、一旦休刊した。一九三一年から一九三四年にかけて復刊したが、「東京住」の学生時代から考えて、これは初期の『郷土研究』ではないだろうか。『なぎの落葉―尾北俗談』には一九一九年すなわち大正八年ころからの文章も収められている。市橋の郷土研究には、それ相応の積み重ねと柳田の影響があったのである。

三、「民俗学」以前のまなざし

市橋鐸の著作には、戦前に発表された文章が晩年に復刻された場合が多いが、その中でももっとも古いもののひとつが、一九一七年に発表された戯作「千客万来　与太話浮世繰」（『若き日の夢―大正の巻―曳馬草紙』一九七七年）である。初出は雑誌『智仁勇』（犬山壮年会）に掲載されたという。『智仁勇』は旧犬山藩主の成瀬家が経済的にバックアップして出版されたという。二〇代半ばの学生、市橋が記したこの文章には、大正当時の犬山の人々の生活が活写されている。ト書きには「時代大正六年夏の夜／場所　尾張犬山のとある町並の夕涼台を中心とせる一廓」とある。ここに注意したいのは、舞台が世間話が話される場だということである。市橋のまなざしは、本格的に「民俗学」と接触する以前から、このような話の場に向けられていたのである。この戯作の内容は、大きく次の八場面に分けられる。（6）のみ全文を引き、他は要約して示す。

（1）場の設定（「夕方になると死にそこないの、あっちゃ、こっちゃの山の神連、夕涼台をもち出して巾のせまい道路にきちんとすえつけ」暑いといって集まる）

（2）トチベさの話（トチベさがした公園の動物園で猿が心中をやりかけたという嘘話について）

（3）髪結の話（髪結が登場して、新任の警察署長が「鑑札」や「清潔」について厳しいという話）

（4）鵜飼見物人についての話（日本ラインという新しい呼び名について。電車が開通してから、孤児院や押し売りが来るようになったという話）

（5）赤痢流行の話

（6）伝染病院小使浅井君通称大笑の話登場

「大笑さ、今どの位ござるな

「へ、あのお二人で

「そでも、ぎょうさんござるといふがな

「そんな話もございますかな、気候が悪いと、ぽち〳〵出来ますで

「あれ行ってしまあした、おかしな人ぢゃなも

「あの人、ひる日中、きつねにばかされさんしたげなんな

「どこで

「中町の豊場屋へゆくとて、中町を、なんべん、行ったり来たりしても、分らんげなで、お経をよましたげなら、わかつたげな

「ほんとにや

（7）犬山の若衆たちの芸妓についての話

（8）犬山の名物男綾三の話

いずれも世間話として興味深いものである。たとえば（2）、（6）、（8）はおどけ者話あるいは愚か者話の一類だと考えてよいだろう。これらの話題が、当時の犬山のことばで書かれていることもリアリティを確保している。市橋はこの戯作について「登場人物にはモデルがあり、話題は全部事実である。方言に注をはぶいたのは、読んでくれる人々は皆犬山の人だからで

ある」と再録時に付言している[4]。市橋はこのように話の場に対して、こまやかな観察を行っている。市橋には、このような話の場を描写する能力があり、そうして、それは民俗学の影響というよりは、市橋の育った環境によるものと思われる。

それというのも、市橋は、しばしば自分が子供のころに伝説を聞いた環境について回顧していた。それは大きく、母・鈴木鎮女から聞いた記憶、隣りのおばさんから聞いた記憶、向かいのお爺さんから聞いた記憶の三通りである。

ア、その頃は別に敬道館の資料を集めていなかったので、実母からの寝物語が軸となっている。（「おくがき」（『尾北世間話』一九七七年））

イ、冬の夜更けになると、よつくその鳴き声（お小女郎狐の鳴き声―高木注）が聞えてきた。母のふところにしっかりしがみついている私自身の昨日の姿、そこにたまらない親しみを今日の私も多分にもつている。（「老狐小牧山吉五郎序」（初出一九三一年、『序跋集』一九七一年に再録））

ウ、お隣のおばさんは起（現愛知県尾西市―高木注）が在所だつた。何でも大家の娘さんだつたそうな。（中略）おばさんの口からはよく生れ里の名がもれた。朝鮮の使のわたつたという舟橋の話、娘つ子達の唄う機織歌、宿場のにぎやかだつた頃の姿、それらは皆おばさんに聞いた知識である。（「序」（『起町史』一九五四年））

エ、2の入鹿今昔綺談は、決潰当時、現地を見にいったという、向えの小野木（小野木鉦三―高木注）の爺さんの話をもとゝして綴ったものに、後年放送した入鹿物語の話題を加味してなしたものだ。（「おくがき」（『尾北世間話』ア に同じ）

オ、私などの子供の頃は、まだ昔話を知っていたお年寄が、近所にいられたものである。お向えの小さい文房具屋のお爺さんもその一人、それでよく仲間を誘って、おねだりをしてその話術に聞き惚れたものである。（「序」（愛知県郷土資料刊行会『愛知のむかし話』初出一九七三年、『巡り来し道継足二』一九七九年に再録））

カ、お向えの小さい文房具屋の老爺さんは、話好きだった。夏となれば夕涼台で、冬はいろりばたでいろんな伝説とか説話なんかを聞かせたくれた。これが私との伝承の馴れ染めのはじめである。（「序」（福田祥男『増補愛知県伝説集』初出一九七二年、オに同じく再録））

キ、自分達の明治男が子供の頃には、各部落にむかし話をたくさん知っていた爺さんや婆さんが一人や二人はいたもので、夏は夕方の涼み台で、冬は囲炉裡傍で、巧みな話術で聞かせてくれたものである。子供達は真実の話でもあるかのように、眼を丸うして聞き入ったものである。（「続あいちの昔話」の刊行にあたって」（愛知県郷土資料刊行会『続愛知のむかし話』初出一九七四年、オに同じく再録））

ア、イは母から、ウは隣りのおばさん、エ、オ、カは向かい

のお爺さん話を聞いた記憶である。キは一般の論を述べているようであるが、そこに揺曳しているのは、市橋が話を聞いたこれらの人々、特に向かいのお爺さんの面影である。そうしてこれらの記述は、カ、キでの話の場に窺えるように、先の戯作「千客万来　与太話浮世繰」の舞台設定、夏の「夕涼台」とも重なってくる。これは、たとえば関敬吾『島原半島民話集』が、母・関タダシの伝える昔話を多く紹介したのと同様に、おそらく初期の口承文芸や民俗への興味を抱いた人々は、子供時代の記憶が大きく作用していたのではなかろうか。そうして、そのような記憶と柳田國男の企図した口承文芸研究とには、それぞれに微妙な懸隔があったように思えてならない。が、それはまたの機会に述べよう。市橋鐸の場合、柳田國男の影響のもとに口承文芸研究を志したというのではなく、子供の頃の体験が大きく作用していたのである。

このことは、市橋の伝説への興味が、柳田のそれとは異なっていることを意味している。異なるのは、柳田の存命中ならば、決して有利なことではなかったであろう。たとえば、柳田國男一門による中山太郎の民俗学や藤沢衛彦の伝説研究への扱い方を想起すればよい。ただし、いまここでは、それらの中に、柳田一門のその後の研究とは異なる研究の可能性もあっただろうという指摘も、多くなされてきている(5)。

それならば、ここでの市橋鐸の可能性とは何だろうか。

それは、おそらく、「昔話の語り手論」と対比される「伝説の物知り論」「世間話の話し手論」ということになるのではなかったかと思う(6)。オ、キでは「昔話」「むかし話」という語も見えるが、これらの初出の書『愛知のむかし話』『続愛知のむかし話』をひもとくと、ここで「昔話」と呼んでいるのは、柳田の説く伝説や世間話のことだと知られる（市橋は、これらの語の違いを知らなかったわけではないのだろうが、書名にあわせて「昔話」を用いたのだろう）。市橋の興味は、伝説や世間話（特に伝説）に傾斜し、特にその担い手を意識することに特色があった。そうしてそれは、伝説をハナシではなくコトだと言った柳田國男、さらには、特に柳田以後の研究者たちの興味からするならば、おおよそ傍流の興味だったのではなかろうか。というのは、昔話の場合は、表現（文学）に注目してそれを伝える場やそれを工夫する人への興味が起こりえるけれども、伝説の場合は、内容（信仰）に注目するので、表現の工夫をする人への興味よりも、伝えられた信仰にまつわる事柄や事物への興味が優先するからである。あるいは、あったとしてもそれは、伝説を流布した伝播者への興味、すなわち歴史への興味なのである。そうして、柳田國男は昔話においてさえも、しばしば、過剰な（と彼が判断する）表現の工夫には冷淡だったことを思い起こしたい(7)。

しかし、伝説や世間話もまた、伝える人による工夫がいろいろとなされていたのである。たとえば最近の飯倉義之の千葉県の増間話、竹内邦孔の新潟県の上路の山姥伝説をめぐる言説分

析は、これらの話を伝える人々が、口承にとどまらないさまざまな工夫を施している人々であることを教えてくれる[8]。市橋の伝説の担い手への興味は、じつは市橋じしんの存在をも含めた形で、伝説とそれをとりまく人々とのかかわりに目を向けさせる機縁ともなるだろう。

四、生徒を使った資料収集

少しおおきくなると「日本伝説集」（高木敏雄『日本伝説集』―高木注）とかいった本を手に入れて、独り部屋にとじこもって、いかにも勉強をしているような振りをして、読み耽ったものである。お袋などは、あれほど勉強しているのに、成績が香しくないので小頸を傾けていたとやら言うことだ。

これが素因をなしたものか後年旧制中学の教師となって各地を転任して回った時などは、その地、その地の伝承を宿題として課して聚集したものだったが、宿題としてはあまり香しくないという評判もあったようだ。

それが郷土の学校（旧制小牧中学―高木注）に赴任してからは、同趣味の同僚がいるのに力を得て、全生徒の宿題とし、かてて加えるのに「すでに他の本に発表されている話は避けること」「短くてもよいから、爺さんや婆さんから直接聞いて、その方の名前と年齢を書き添えること」などといった但し書きをつけたものだった。

その結果は大成功で、その年の校友会誌に発表、さらにそれだけを抜刷して「尾北巷談」と題して刊行したものだ。これを見て始めてこのこころみを知った同僚のなかには、それに見られない話を寄せてくれた方もあった。

そこの学校では五冊ほどこの種の抜刷を出したと覚えている。ここを辞して、近世の未刊本の翻刻事業（『名古屋叢書』の編纂―高木注）に従事したが、編集八ヶ年の間には、珍しい伝承にお目にかかることが多くて満悦したものだった。然し刊行の方は、戦局の拡大と敗戦でストップがかかり、やっと四年程前に四十六巻として上梓したが、その間も講義の息抜きとして伝承をもてあそんでいた。

これが自分と「伝説・説話」との、今までのつながりだが、上述でもわかるように、一本釘が抜けていて、よくいって趣味、ざっくばらんにいうと物好きの域を出ていない。（「序」（福田祥男『増補愛知県伝説集』初出一九七二年、『巡り来し道継足二』一九七九年に再録））

高木敏雄『日本伝説集』が刊行されたのは、一九一三年である。市橋二〇歳。医者になれという両親の勧めをかわしながら、部屋で読んでいたのであろう。

一九一五年、二二歳で國學院大学国文学科入学したが、大学では特に国史学科の八代国治に師事して史跡踏査に夢中だったようである[9]。ちなみに折口信夫（一八八七―一九五三）は

二八歳で、この年「髯籠の話」を発表、郷土研究会で初めて柳田國男に出会っている。折口の駆け出しの時代である。市橋の入学した頃、國學院に民俗学はいまだ充分に根づいていなかった。市橋に折口の影響はなかった[10]。市橋の伝説研究は、本人の言うとおり「趣味」「物好き」として続けられたのである。

しかし、それでは、その研究がまったくの孤立無援のものであったかというと、そうではない。旧制小牧中学（一九二七年、三四歳から一九四一年、四八歳まで）で、同志に出会っているという。その同志が誰であるのか、これから調査をしなければならないが、注意すべきは、ここで、またそれ以前から、生徒に宿題を出すというスタイルで資料収集（市橋の語では「聚集」）を行い、その成果を刊行していることである。

児童・生徒を使って昔話や伝説を収集するスタイルは、決して市橋一人の思いつきではないのである。早くは日露戦争終結後まもなく文部省による「民間童話の蒐集」があった[11]。また、一九三六（昭和一一）年には、柳田國男門下の鈴木棠三（一九一一―一九九二）が、九月に岐阜県吉城郡上宝村の小学校で、冬休みに埼玉県立川越高等女学校で児童・生徒に昔話を書いて提出してもらっている[12]。これは雑誌『昔話研究』（一九三五年―三七年）が刊行されるなど、柳田の昔話研究の進展と呼応するのだが、たとえば川越高等女学校の場合、歴史の教師だった山田勝利は次のように回想している。

私は昭和八年郷里の埼玉県立川越高等女学校の歴史の教師として奉職した。私は翌年の昭和九年の夏休みの宿題として、全校生徒八百人に対し、郷土の口碑伝説を採集しこれを報告することを求めた。それには生徒の父兄の協力を特にお願いした。その結果予期以上の伝説を採集することが出来た。私はその中の川越市内の伝説を謄写して柳田先生にお目にかけた。柳田先生からは伝説の文学的表現を避けて、物に即した分類をするように御指導を頂いた。柳田先生の成城のお宅に参上したのはこれが最初であったと思う。

（中略）

当時の学校長は広島高師国漢科出身の逸見宮吉先生であった。逸見先生は川越女子高の校歌を作詞するほどに文学的な素養の高い方であると共に、私達の郷土研究の理解者であり、また当時提唱されていた郷土教育の実践者であった。

昭和九年逸見校長は寄宿舎の一部を郷土室として開放し、本校の郷土研究の拠点とされ、その運営を私に任せていただいた。ささやかな一室であったが、ここにこの地方の郷土研究の資料が蓄積され、『川越地方昔話集』成立の背景をなしたのである。

当時郷土室の設置は、川越女子高のみではなかったようである。川越地方郷土研究第一巻第一冊の論文編の中で、吉村勝敏先生は「郷土主義並びに郷土化教育が提唱される

ことになったのは、欧洲大戦後に於ける時代相の反映であって……大正年間に於ける史蹟名勝天然記念物保存に関する運動と、教育の地方化、実際化の要求とが前後して、郷土化教育の必要を促進することに至った。（中略）我が国の郷土化教育には、二つの重大な使命の存することが窺はれる。我が国の文化が欧米の影響下にあることから脱して、新日本文化の建設に向はなければならぬことであり、他の一つは、従来の画一性に伴ふ抽象的形式化に対する欠陥の指摘である」（原文のまま）としている。やや長く右論文を引用したのは、そこに川越女子高が認めた川越地方郷土研究の理念が端的に表現されていることと、その時代がまた柳田先生を中心としての日本民俗学が、その巨歩を進めつつあった時期を一つにしているものと思われるからである。（山田勝利「編者ノート」（鈴木棠三編『武蔵川越昔話集』一九七五年）

引用文中にもあるように長い引用になってしまったが、昭和八、九年当時の「郷土教育」の隆盛のようすと共にその文脈・背景が窺えよう。市橋が旧制小牧中学に郷土室を構えた事情も、これから類推できるのではないだろうか。

これと関連して、一九三七年に愛知県教育会編『愛知県伝説集』が郷土研究社から刊行されたことを紹介する。「本書の編纂について」は次のとおりである。

一、本書は昭和七年六月愛知県教育会が県下各都市の校長会長に依頼し、各郡市各部会毎に纏めて提出していたゞいた伝説を整理編纂したものである。

二、本書編纂については柳田國男先生の指導を仰いだことが多く、本会の伊那編纂員を主任とし委員宮本秀吉、安藤直太朗、白井一二、藤森哲也の四氏が分任して編纂した。

三、本書の採録した伝説は七百六十九編で、郡によつて報告の多い処と少い処とあり、本県に有する伝説を悉く採録し尽したとはいへない。依て今後尚蒐集を続け、続編を編纂したい考えである。

四、本書編纂の分類については、山とか河とか、植物とかいふやうに、成るべく土地に即した物によつて分類し、説話の内容とか、人物とかによる分類はこれを避けた。

五、記載様式については、文を美しくして文学的の価値ある作品とするのが本志ではないから、今日行はゝ口碑の骨子を質実に記載することにつとめ、着色することは力めて避けた。

六、古い名高い文献にあらはれてゐる有名な伝説は、出典を記して原文のまゝを載せて置いた。

これによると、『愛知県伝説集』は「柳田國男先生の指導」によるものであり、その資料収集の方法が校長会の各郡都市各部会ごとによる「提出」というものだったことが分かる。おそらく、その資料収集には、児童・生徒及びその父兄も協力したのではあるまいか。五の「記載様式」では、柳田が川越高等女

学校の山田に注意したのと同様の注意が記されていて、やはり、この当時の学校を舞台にした昔話や伝説の収集が柳田の影響下にあったことを示している。そうして、この教員の協力によってなされた仕事の中に、市橋の旧制小牧中学における生徒から得た資料が入っていた可能性もあるのではなかったろうか(13)。いずれにしても、昭和初期に、全国的に学校を利用した昔話・伝説の資料収集が進められていたのである。

ただ、市橋の生徒を使った資料収集が、「柳田先生の指導」であったかというと、それは微妙であろう。

もちろん、市橋は柳田國男を「先生」と呼んでいた(14)。だが、一方で、市橋の伝説に対する外部とのつながりが、高木敏雄『日本伝説集』から始まっていたことと、その書が新聞を用いて伝説を募集する形で形成されたこととを思い起こすならば、生徒を用いて伝説を収集する試みは、柳田の組織的指導というよりは、高木敏雄の影響、あるいはその当時に流通していた一般的な郷土研究や郷土教育上の方法であったのかもしれない。このような資料収集の方法がどこからもたらされたものであるのか、管見の限り、市橋は記していない。だがこれまで紹介してきた事例からも窺えるように、市橋の生徒を使った資料収集にも、それなりの同時代的な文脈・背景が読み取られることは、市橋の位置を知る上で、おろそかにできないことである。市橋は同時代の民俗学や伝説研究と、確かにつながっていたのである。そうして、その後この方法は、現在も行われているとはいえ、現在のフィールドワークの主流とはいえなくなっている。だが、このような「生徒」というその地に生活する「人」を介した資料収集には、現在のフィールドワークとは異なる動機が働いていたのであろうし（さしずめ、柳田國男の場合ならば小さな読者たち（小常民）に、民俗のあり方を気づかせるという、常民改良運動の意図が込められたであろうか(15)、ひょっとすると、いまここのフィールドワークの持つ問題点を炙り出す役割が期待できるのではなかろうか。

五、「市橋鐸」といまここ

市橋鐸の軌跡をなぞっていくことで、見えてくるものは何か。それは、いまここの民俗学社会に続く柳田國男を頂点としたその後の民俗学社会（学界）の軌跡との偏差によって、測定されよう。ここでは大きく、市橋の伝説・世間話研究が「伝説の伝承者」に対して多く記述していたことと、伝説の資料収集の方法が生徒を使うものであったことなどを中心に触れた。そうして、これらのことがらは、従来の研究の中で、充分に検討されてきていなかったように思われる。

市橋鐸の軌跡をなぞることは、おそらく、われわれ口承研究や民俗研究に携わる者たちに、伝説研究における口承の場の問題、フィールドワークにおける行政や学校の制度などとのかかわりを強く意識させる。ここで、われわれはまたしても「研究

者というメディア」の問題に立ち返らされることになるのである[16]。

注

(1)、たとえば、渡邊昭五編『日本伝説体系　七　中部』(一九八二年、みずうみ書房)の「本書所収使用資料一覧」に、市橋の資料は一つも見当たらない。ちなみに柳田國男監修『日本伝説名彙』(一九五〇年、日本放送出版協会)の「資料解説」には市橋の『尾北巷談』が掲げられているから、忘れられた伝説研究者といってよいのかもしれない。市橋の愛知県立女子大学教員時代に助手を勤められた安田孝子からは、市橋が民俗学や伝説研究をしていたとはまったく気づかず、近世文学専門の研究者だと思われていたとご教示を受けた。また、市橋は、民俗学の語よりも、「郷土研究」(郷土史ではない)を好んで用いていることも、民俗学者という位置付けに影響しているかと思われる。この文章は、「郷土研究」という語の時代性や可能性をも含めて、本来は、「郷土研究者としての市橋鐸」と命名すべきであったかもしれない。

(2)、市橋じしんは、「郷土研究」といい、「民俗学」を用いることがほとんどないのである。しかし、市橋が「民俗」という語を使用した早い例は、本人の申告によると一九一八年に著した「尾北の民俗哥」だという。これは市橋の國學院の学生を卒業するときに犬山壮年会の『智仁勇』に発表したという(「尾北世間話」『辿り来し道継足二』一九八八年)。しかし、市橋の『なぎの落葉―尾北俗談』には、同じものが「尾北の風俗歌」と書かれていて、判然としない。犬山市立図書館に『智仁勇』が見出せないため、原典に当たれないもどかしさがある。

なお、市橋の俳文学関係と郷土関係とには、脈絡がある。『俳人丈艸』の「はしがき」は、「それはまだ私が母のふところに抱かれてゐた頃のことであつた。母はよく寝物語に丈艸の名を聞かせてくれた。(中略)貧しけれども、私の丈艸研究の種はそこに播かれたのであつた。」と書き始められている。これは、俳文学もまた伝説や伝承のひとつとして受容したことから、興味を持ち始めたことを示している。

(3)、注(1)に紹介したように柳田國男は『日本伝説名彙』に市橋の資料を用いている。しかし、『俳人丈艸』は見当たらない。一方、市橋は柳田の伝説関係の著書は見えるが、昔話関係の著書は見当たらない。お互いの興味が、微妙にずれているようである。

(4)、あだななども、そのままのものだと思われる。

(5)、たとえば、早い時期のものでは、瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス』(一九七九年、ぺりかん社)に収められた諸論考の中に、そのような読み替えを促すものが見られた。

たとえば、奈良県の高田十郎の奈良県童話聯盟監修・高田十郎編『大和の伝説』(一九三三年、大和史蹟研究会)、高田十郎

著『随筆民話』（一九四三年、桑名文星堂）などは、両書とも柳田國男の序文があるけれども、しかし、高田の姿勢は、柳田の志す民俗学とはそうとうに懸隔がある。そこにみえる可能性を問うことは重要であろう。

（6）、昔話の語り手論については、野村純一編『昔話の語り手』（一九八三年、法政大学出版局）をはじめとして、多くの論文にめぐりあうが、伝説の伝承者についての論文は、ほとんどなかったのではないか。高木史人「伝説の管理者」（野村純一他編『昔話・伝説小事典』、一九八七年、みずうみ書房）では、伝説の管理者を口承から書承にまたがる存在としてムラの不思議の解釈者としての伝説の〈物識り〉の機能を説いた後、「〈物識り〉は、やがてムラ内で〈学者〉〈先生〉と呼ばれて、市町村の公民館活動、教育委員会などで独特の位置を占めるようになった」と述べたが、その後の実践報告はしていない。また、「昔話の語り手論」じたいが、その後の「昔話の聴き手論」へと推移していった中で、「伝説の伝承者論」は成長をしなかったのではなかったろうか。さらに、ムラの〈学者〉〈先生〉は、民俗学のフィールドワーカーに敬遠されるという不幸もあったと思う。それに比べると、「世間話の話し手論」は、〈口承〉のみで解釈できるという同一の幻想からか「昔話の語り手論」に付随しながら、わずかながらもその報告例はあるようである。

（7）、たとえば、佐々木喜善『聴耳草紙』（一九三一年、三元社）における「序」など。

（8）、飯倉義之「愚か村話の近代―「解釈する言説」の変遷―」（『口承文芸研究』二四、二〇〇一年、日本口承文芸学会）、同「史料としての郷土史家―フィールドの中の郷土史家―」（『世間話研究』一一、二〇〇一年、世間話研究会）、同「増間話の研究―安房郡富浦町のフィールドワークを中心に（Ⅰ）落人の発見―」（『伝承文化研究』創刊号、二〇〇一年、國學院大学伝承文化学会）。竹内邦孔「「山姥さん」から「山姥」に―信仰から説話へ―」（口頭発表、二〇〇一年七月八日、日本昔話学会、於中京女子大学）。

（9）、市橋の回想は、次のとおりである。「学校での印象でいまだに覚えているのは、月毎に催された国史科の史蹟巡りに皆勤して主任のY先生から同科の学生と誤解され、それが国文科とわかつて大いに面目をほどこしたことと（以下略）」（「少女歌劇に通い詰め―神主の卵―」『傘寿』一九七三年）

（10）、犬山市楽田（旧楽田村）の本宮山にまつわる山姥伝説（「山姥物語」として、近世から明治初頭にかけて、御伽草子風の諸本も存する。骨子は「鍛冶屋の婆」にもとづいている）について、市橋鐸は『山姥物語』を著している（一九七〇年）。同書中「序編　その一　山姥の正体」で市橋は、折口信夫の「山姥は山の巫女」という山姥解釈を退けている。その上で、柳田國男の「機織御前」（『日本伝説集』一九二九年、アルス）を援用して、芋ヶ瀬池（岐阜県各務原市）の龍神伝説と結びつけて山姥の正体を「機織姫」だと解釈している。

(11)、関敬吾「解説―昔話蒐集史の一齣―」(『福岡昔話集』一九七五年、岩崎美術社)。

(12)、鈴木棠三『しゃみしゃっきり』(一九七五年、未来社)、同『武蔵川越昔話集』(一九七五年、岩崎美術社)。ほかにも、鈴木は翌一九三七年に長崎県対馬に昔話収集に出かけ、そこで栗田仙吉翁(通称くったん爺)に出会うのだが、翁に会うまでは、「女学校で話をして生徒に書いてもらつたものと、旧士族の老人に十ばかり話してもらつたのが厳原での収穫で、次に佐須村小茂田の小学生に同様に書いてもらひ、其次に行つたのが、所謂くつたん爺の居る阿連であつた。それ以外は、上島の曽で島居伝氏の肝煎りで小学生に書いてもらひ、最後に鶏知村洲藻で十数話聞いたのが全部である。」(「くったん爺のこと―対馬の話者」『昔話研究』二―九、一九三七年)というように、児童・生徒への書き取り調査が多かった。これらはいずれも、当地を訪れて、教員の協力のもとに行われたものであるが、このような方法が可能になった背景には、地元の教員の間で、郷土研究や郷土教育の名のもとに、この種の調べごとが受容されていたことがあるのではないか。今後、調査していきたい。なお、野村純一「註解ノート」(『柳田國男未採択昔話聚稿』二〇〇二年、瑞木書房)に言及がある。

(13)、ただし、『愛知県伝説集』のうち、犬山市(旧丹羽郡犬山町)を含む旧丹羽郡の収録数は、全七六九話中三四話であって、多いとはいえない。収録数が多いのは、北設楽郡・南設楽郡・寶坂郡であって、たとえば北設楽郡は一五七話である。早川孝太郎の存在が大きいのだろう。また、この事業が小学校を中心に行われていた事情があったのかもしれない(小国喜弘『民俗学運動と学校教育』二〇〇一年、東京大学出版会)。

(14)、注(10)に紹介した『山姥物語』でも、柳田國男を「先生」と呼んでいる。

(15)、「常民」については佐藤健二『読書空間の近代』(一九八七年、弘文堂)を、「小常民」については重信幸彦「「昔話」の発見」(『〈口承〉研究の現在』一九九一年、筑波大学日本民俗学研究室)を、参考にした。だが、柳田國男じしんは、子供に書かせる作業を、「かわいそうなことをする」と批判していたと、佐藤健二からご教示を受けた。だから、この部分は、やや強引な論旨かもしれない。考えつづけたい。

(16)、高木史人「研究者というメディア」(『口承文芸研究』二三、二〇〇〇年、日本口承文芸学会)。また『口承文芸研究』二四(二〇〇一年)には、同名の小特集が組まれ、また、重信幸彦編『〈口承〉研究の地平』(二〇〇一、「口承」研究の会)の矢野敬一、根岸英之、高木史人の論文に言及がある。高木史人「〈口承〉研究といまここ―「近代文学」としての「口承=文学」」(『日本近代文学』六五、二〇〇一年、日本近代文学会)参照のこと。

(付記)市橋鐸については、一九九八年の春に、臼田甚五郎先生宅でその名前を伺ったのが、興味を持つはじめであった。小

論は、二〇〇〇年秋に愛知県立大学の第一回「あいち国文の会」（野崎典子氏の肝煎）で拙い発表をしたのが、出発になっている。注（1）に示したように安田孝子氏らＯＧから多くの貴重なご教示をいただいた。また、その後、口承・文化研究・会、物語研究会などでも発表をし、二〇〇一年度日本口承文芸学会大会では、斎藤純氏、佐藤健二氏からご意見をいただいた。また、学会後、飯倉義之氏、大島建彦氏、野村典彦氏から資料についてのご教示をいただいた。研究史という性格上、本文中の敬称は省略したが、末尾ながらご意見、ご教示を下さった方々に御礼申し上げる。

（たかぎ・ふみと／名古屋経済大学）